On “ficticious” words
静的語彙観をひっくり返す

萩澤大輝

英語の語彙を仔細に観察すると、そこには様々なバリエーションが潜んでいることが分かる。辞書のように正確を期する媒体は (1) のような非標準的な語形に注意を促そうとするが、それでも引用者の目をすり抜けることもしばしばあり (2)、さらにそうした語形が（引用文中ではなく）地の文で平然と用いられることすらある (3)。

(1) 1835 *Gentleman's Vade Mecum* A Clam Bake—Our **curiousity** [***sic***] has been gratified, as to the nature of the festival understood by this term. (*Oxford English Dictionary*, s.v. *clambake*)
(2) 1840 *J. Pardoe City of Magyar* III. 189 The delighted Theresa was instantly all **curiousity**, and insisted on knowing what the Queen was like[.] (*OED*, s.v. *first lady*)
(3) Etymology: < the name of Charles *Pooter*, the **ficticious** author of George and Weedon Grossmith's *Diary of a Nobody* (1892). (*OED*, s.v. *Pooter*, n.[3])

事情は権威ある新聞や学術書などでも同様であり(4–6)、このような異形（バリアント）が予想以上に多く観察されることを語法書は驚きをもって受け止めている (7)。

(4) I am trying to find a less **perjorative** word than “crazy” to describe this situation. (*Washington Post*, January 26, 2022)
(5) The pledge to scrutinise Qatar's **committment** to worker welfare from the Swiss-based body came as the wage rates paid to workers on the Al Wakrah stadium were attacked as "deplorable" and "tainting football" by a series of senior British politicians. (*Guardian*, 30 Jul 2014)
(6) The environment that influences the composer’s choice includes fellow composers, **precedessors** and contemporaries, who chose the sonata form among other forms for their compositions. (William Croft, *Explaining Language Change*, 2nd ed., Ch. 2)
(7) Surprisingly, it is occasionally spelt *epitomy* even in quality newspapers: *You can’t help but admire Terence Stamp.* ***Epitomy*** *of the swinging Sixties, heart throb* [sic] *to a generation of women—Observer Food Monthly*, 2002. This spelling is non-standard. (Jeremy Butterfield, *Fowler’s Dictionary of Modern English Usage*, 4th ed., s.v. *epitome*)

この種の揺らぎは、color と colour などとは違い、存在が周知され正式に認められた異形ではない。いわば「野良」バリアントである。この現象を具体的にどう分析するかは、「語はどういう存在者なのか」という、より基礎的な論点に依存する。暗黙のうちに広く採用されていると思われるのは、物理的な個体として（いわばモノ的に）捉える見方である。有用な面もあるものの、そうした見方はあくまでメタファーである（Langacker 2016a）。以下の引用で簡潔に語られているように、語はモノ（個体）ではなく、むしろ人間の行う活動であると（コト的に）捉えるほうが実態に近いというのが、認知文法・使用基盤モデルの基本的な考え方である（萩澤・氏家 2022 も参照）。

(8) Actually, there is no such thing as “a language”, at least as this term is commonly understood, both by linguists and by ordinary people. To a large extent this understanding is metaphorically constituted. [...] Such metaphors reflect and support the conception of a language as a distinct, discretely bounded, clearly delimited entity that is basically stable and uniform within a community of speakers. [...] The basic reality is simply that people talk, in ways that are similar to varying degrees. Talking is a complex **activity**, so ultimately a language must be viewed dynamically, as something people do rather than something they have. (Langacker 2008: 215–6)

すると、ある意味で「誤り」など存在しないことになるようにも思われる。だが、*ficticious* は誤用だという感覚が存在するのも確かだろう。その直感を維持するためには、*ficticious* が fictitious という規範的な語と何らかの意味で同一だということを示す必要があるが、語の同一性を抽象的に規定しようとする従来の試みは成功していない。現実的な路線としては、「どういう語が存在するか」や「この使用は慣習的か」といった判断が、すぐれて人間的な次元で生じているのだろう。こう考えることで、*ficticious* に感じられる誤用性と自然さを両立させる道が開けることになる。真に驚くべきは、語に揺らぎが見られること以前に、そもそも語に同一性が成立することだったのである。かくして問いは「なぜ規範形だけでなく様々な異形があるのか」から「なぜ完全な無秩序ではなく“語”がある（と思える）のか」に転換される。

以上を踏まえ、語という存在の重要な側面は、多分に自動的ながらも創造的な秩序構築（＝リンク発見）と模倣によって広まる文化的な技術であると考えよう（萩澤 2020, 2021）。このリンク発見は、まさに使用基盤モデルの中核をなすカテゴリー化である。使用基盤モデルの世界観において、「語」とは所与の抽象的存在ではなく、個人が試行錯誤のうちに発見して習得し、絶えず調整を加えながら維持する記号［の機能を果たす対人スキル］なのである（Langacker 2016b: 1 の表現では Language is a means of symbolic interaction）。

言語がすでに運用されている世界に投げ落とされた人間は、なかば手探りでそこに秩序を見出していく。周囲で使用されている記号を見よう見まねで模倣するため、語をはじめとする言語表現は機械のような正確さでコピーされるのではなく、人間的な調整が加わった状態で伝播する（そして文化進化が生じる）。冒頭 (1–5) で見た野良バリアントも単なる無知として片付けられるものではなく、合理性や体系性を発見しようとする試みの産物と考えられる。例えば英語の語彙には amb**ition** – ambit**ious**, nutr**ition** – nutrit**ious**, repet**ition** – repet**itious**, superst**ition** – superst**itious** のような規則性が存在するが、fict**itious** に対して?fict**ition** なる語は一般的に使われていない。*ficticious* というスペルを用いる話者は、上のような系列ではなく、cons**cious**, deli**cious**, gra**cious**, pre**cious**, suspi**cious** などとの関連を（無意識のうちに）発見しているのだろう。その他の例も同様で、いずれも無軌道なエラーではなく、局所的にであれ秩序を形成するものである。このように実例をつぶさに観察する限り、言語の実態においては流動的な使用こそが標準であり、安定的な語彙とは理想化にすぎないと考えるのが自然である。

それでもやはり、安定的な規範が確固として存在し、上のような使用はそこからの逸脱だという考え方を維持したい向きは根強いと思われる。これにはいくつか応答の仕方がある。まず、現在なんの疑いもなく「規範」だと思われている語も、過去の言語使用者によるリンク発見の蓄積であり、流動的な経過を辿ってきたものである。さらに、ある種の認知的性向の作用も指摘できる。Langacker（2016c）に即して述べるならば、人の流動的な振る舞いよりも、固定的な語の方が認知の「基準」（baseline）として働きやすいということになる。静的語彙観にはそれなりに強固な認知的基盤があるのである。この捉え方には、語に関して「big に-ly を付ける」のような端的な語り方が可能になるという利点もある。ただ、一般に「太陽が昇る」という表現をすること自体には何の問題もなく、また非専門家が天動説を信じていても特に構わないにせよ、専門家までが素朴に天動説を信奉し続けることは学問的に不適切だろう。多様な使用に先立って規範や慣習がモノ的に存在すると考えるのは、それと同様の錯誤なのである。

もちろん、個人の体験としては、自分の知識や意図を超越した慣習が存在していると感じられるだろう。そうした信念を抱けるというまさにその「能力」こそが、慣習の成立には不可欠である。しかし、個人レベルの体験を言語全体の記述にそのまま投影するのは飛躍である。個人が野良バリアントなどを口にするたび、使用頻度にわずかな変化が生じ、およそ感知不能なほど極めて微量であれ、慣習そのものが影響を受けるのである。こうした流動性のもとに語彙を捉えると、表現の意味が合成的に計算できなくなることも危惧されるかもしれない。しかし、認知文法のゲシュタルト的な意味観からすると特に問題は生じない。

語を活動として、特に技術の一種と見なすことで、「独立発明」という現象が生じることも予測される（萩澤 2021）。語の独立発明は、単純で直感的な語（オノマトペや略語など）や、造語欲求が駆り立てられる経験を不特定多数が共有する場合（伝染病の蔓延など）で特に発生しやすいと思われるが、平安時代と現代のように隔世的なケースも散見される（「段違い」を略した「だんち」など）。いずれにせよ、類似した発話意図で類似した形式が用いられれば、抗いがたいリンク発見の力が往々にして働き、結果的に「同一の」語として見なされるのである——たとえ時代的にかけ離れていたとしても。

このことを考慮に入れることで、慣習性という概念は精緻化される。頻度や普及度に加え、そのメタ認知も重要なファクターとなるのである。例えば、多数の英語話者が同時多発的に covidivorce（コロナ離婚）という語を思いついて個人的に使用していたとしても、それだけでは不十分であり、「みながその言葉を使っている」という事実がメタ的に認識されていなければ慣習としては成立しないのである。

まとめよう。*ficticious* のような語形は、その発信者によるリンク発見・秩序構築の試みの産物であって、一定の合理性を持つ。一方、受け手の側も絶えずリンク発見を行っており、慣習を基準（baseline）に据えた認識がほぼ自動的に生じる。ここに「誤り」と感じられることの根拠がある。きわめて多様な使用事象がごった煮のように展開しているのが言語の実情であり、静的・安定的な語彙というのは事後的に立ち現れる理想状態、一種の「虚構」（descriptive fiction）なのである（Langacker 1987: 388）。

参考文献：萩澤大輝 (2020)「語形成のそもそもを考える」『東京大学言語学論集』42, 41–58. / **萩澤大輝 (2021)**「文化的技術としての語」『東京大学言語学論集』43, 1–19. / **萩澤大輝・氏家啓吾 (2022)**「リンク発見ゲームの諸相：「記号が存在する」というフィクションを超えて」『東京大学言語学論集』44, 1–18. / **Langacker, Ronald W. (1987)** *Foundations of cognitive grammar*, vol. 1: *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press. / **Langacker, Ronald W. (2008)** *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press. / **Langacker, Ronald W. (2016a)** Metaphor in linguistic thought and theory. *Cognitive semantics* 2, 3–29. / **Langacker, Ronald W. (2016b)** Nominal grounding and English quantifiers. *Cognitive linguistic studies* 3(1), 1–31. / **Langacker, Ronald W. (2016c)** Baseline and elaboration. *Cognitive linguistics* 27, 405–439.